

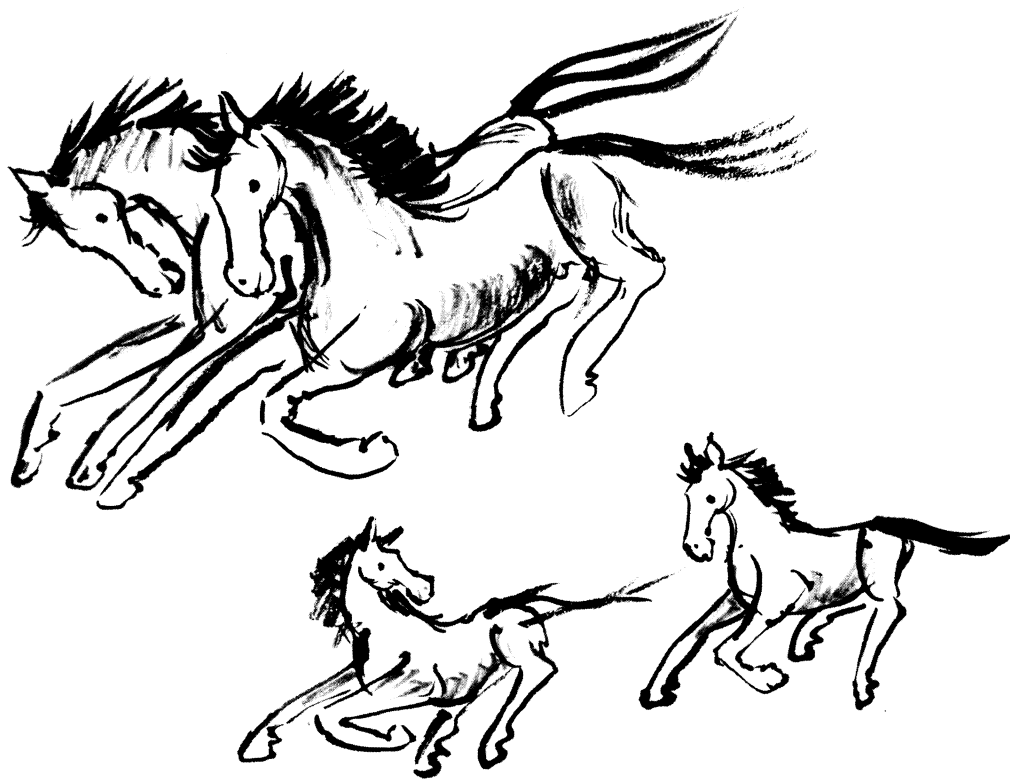
鏡の間

馬

三年

私は、馬が大好きです。五才のときから乗馬をしています。私と馬は、お互いに理解しあっています。

小一の夏休みに私は、青森県五戸のマルシチ牧場へ、日本で五頭目のひふも毛もまっ白の馬に会いに行きました。名前は、白宝（ハクホー）といいます。はじめてあった白宝は、甘えんぼで、遊びっ子で、きかんぼでした。私の両方の肩を「遊ぼう、遊ぼう。」と齒もちよつとしかはえていない口で、カップツとかみました。ちよつと痛かったけど、うれしかったです。しばらく白宝と遊んでから帰ってきました。そして、去年の夏休みに、私は白宝に会いに、北海道の紋別の天羽牧場へ行きました。久しぶりの白宝は、背がスラリと高くて、



ハンサムで、大きくなっていました。私のことをおぼえてくれて、Tシャツをひっぱって「遊ぼうよ。」といってくれました。うれしかったです。

乗馬クラブの馬たちもよく「遊ぼうよ、遊ぼうよ。」といっています。いつもお手入れをしたりして、お互いに信頼しあっているから、甘えたりするのだと思います。おこられたりすれば、馬はすごく反省します。そのあとは、ちゃんと人參をあげたりして、また仲良くします。こういうことの積み重ねで、お互いの信じあえる心が生まれるのです。

私は、馬たちといると元気がでできます。馬たちは、けっこうおしゃべりです。そのおしゃべりが、私には聞こえます。

馬の絵は、[redacted]が四、五分で毛筆を使って書いたものです。写生や下絵を元にするのではなく、イメージ運動のヒラメキでススツと書いていく。晩年上原先生が馬の研究をされていたことと合わせて、報告します。

（報告者 玉川学園小学部

武村昌於）

